



茂藤 幸恵さん きらりびと
味噌づくり、団子作りなどを教えている。

二人のきらりびとに話を聞くことができた。2人とも地域の女性が作る加工部に入っており、きらりびと制度が始まる前から交流館で子どもたちに野菜作りや郷土料理を教えていて、活動を通じてきらりびとに登録したと言っている。子どもたちにどんなことを教えているんですか？

石山さん（以下…茂藤） 料理などを教えています。子どもと一緒に料理をして、おいしいと言ってもらうととてもうれしい。家族で来て、お母さんが方が楽しんでくれることもありです。それで気に入って、何回も来てくれる。受け防止じゃないけど、一緒になってやる仕事は楽しいね。

茂藤さん（以下…茂藤） にしめなど郷土料理を教えて、食べて喜んでもらうことが一番。「まいっちよつくるかな」って思います。難しいことは教えませんが、普段やっていることを、子どもたちと一緒にやるの。家に帰って作ってくるといいけど、それはまだ少ないみたい。だから一緒に作った時は、

「何かやらなければという中で、グリーンツーリズムが出た」
ストープの熱で暖かい事務所の中、ソファに座り岩崎さんが口を開く。きらり水源村が交流館事業を始めて6年、「まだこれから」と話す。

交流館では1年を通じていろんなイベントを行っているが、それを企画・運営するのがNPO法人きらり水源村だ。職員は全部で5人。地域住民の協力を得て、子ども村やおいしい村づくりなどの試験的な取り組みを行い、グリーンツーリズムを地域に根付かせていこうとしている。

農業体験や自然の中での遊び、生活を体験することで、地球の環境保全や食物連鎖、地球上の自然や生命のエネルギーやリサイクルについて学ぶおいしい村づくり事業では、子どもと保護者が交流館で合宿をする。田畑に作物を植えて、収穫した野菜で料理をする。自然の材料を使って道具を作り、自然と人のつながりを肌で感じてもらうのだ。

また、住民を巻き込む仕掛けとして「きらりびと」と呼ばれる制度を用いている。自分のできることを登録し、交流館へ来た人たちに教える。野菜作りから山仕事まで、できることはさまざま。できることに制限はない。地域に伝わる技や知恵、文化などをつな

いしていく意味もあるこのきらりびと制度には、現在43人が登録している。「きらりびとはNPO法人を立ち上げる前からやっていた。技を持った人が、子どものために始めたのがきっかけ。『きらりと光る技』からきらりびと。持っている技術を伝えるために始めた」と話す岩崎さん。登録してくれる人もっと増やして、いろんなことが交流館でできるようになりたいそうだ。

「ここはふれあいの場でもあるからね。ワークキャンプも受け入れていて、外国から来た人がここで3カ月くらい研修する」と教えてくれた。ワークキャンプとは、世界中の人が日本の農山村で地域住民と共に生活し、ボラ

問い合わせ先

きくちふるさと水源交流館
〒861-1441 熊本県菊池市原1600
☎(27)0102/FAX(27)0107
ホームページ
<http://www.suigen.org/>
ブログ
<http://gazoo.com/mura/suigen/>

開館時間
午前9時～午後5時(事務所)

休館日 毎週水曜日

四季を通じていろんなイベントを計画しています。詳しくは、交流館へお問い合わせください。

2人のきらりびとに会って、最初に感じたのは笑顔が素敵なことだった。取材中、笑顔の絶えない2人にこちらまで自然と笑顔になる。本当に楽しそうに、交流館のことを話してくれるのだ。

インタビュウの後、職員が施設を案内してくれた。木造校舎の形を残して、きれいに改装された内部。古いから壊すのではなく、使えるものは再利用されていた。

昔から菊池にあるものや人がこんなに輝いているのは、そこに受け継がれる思いや伝統が溢れているからなのか。ここは便利さと新しいものを求める前に、今あるものの良さを見つめなおすきっかけをくれる場所かもしれない。そしてきらりびとに会いに行けば、きっと笑顔になれる。



石山 美津子さん きらりびと
しいたけ料理、豆腐・こんにゃく作りなどを教えている。

「お母さんに作ってもらわなよ」と言っている。でも、郷土料理を懐かしくて思わないお母さんたちが増えてきたね。

石山 お年寄りと一緒に暮らさない家族が増えて、懐かしいと言わない世代が親になってその子どもと来てから、昔からの料理を懐かしくて感じないみたい。

茂藤 だから子どもたちに郷土料理を伝えていきたいの。

「普段はどんなお仕事をしているんですか？」

茂藤 イチゴ作っとりです。

石山 交流館から「いつ来てくれ」って電話があると、仕事ほっぽってこっち来るの。楽しいもんね。

茂藤 うちのことせんでよかなら、一日中こっちにおるよ(笑)

石山 今はボランティアのようなものだからね。

「収入は農業だけなんですか？」

石山 注文があれば、加工部で交流館の設備を使って、お弁当を作って販売しています。

茂藤 でも3、4人でできる仕事にみ

んな来たがっちゃうの。同じ年代の人が集まるから、終わってからのお茶と世間話が楽しみたいね。でもみんなに分けるから収入は少なくなる。

石山 だから家の仕事もしないとけないですよ。

茂藤 収入があればそんなのほっといて来るよ。楽しんで仕事して、それにお金が入ってくればなおいかな。

「じゃあ、交流館にも人がたくさん来てくれるといいですね。」

茂藤 今でもたくさんの方が来てくれるけど、もっと菊池に住む人に来てもらいたかね。だつてここを知らない人もいるでしょ。それに水源地域の人たちも、もっときらりびとに登録してくれたら「しめたもん」って思います。

石山 旦那も入れなね(笑)

「今までの活動でこれは成功したとか、これは失敗だったというものは何ですか？」

石山 失敗することもあるかもしれないけど、そこはほら、うまくごまかします。

茂藤 来てくれた人がすごく喜んでくれたらそれが私の成功。「わあーよかとこ」ってみんな言ってくれる。喜んでくれると、それがうれしくてね。

「楽しいお話をありがとうございました。これからもきらりびととして活躍してください。」

茂藤・石山 こちらこそ、ありがとうございました。

「輝く笑顔のきらりびと」

「終わりに」

なぜ、交流館に人が集まるのか

菊池東中学校跡地利用促進協議会は、こどもあーとともに事業実施や組織の体制作りを進め、民間の非営利法人である「NPO法人きらり水源村」を設立した。

きらり水源村が管理するきくちふるさと水源交流館には、若い人も、お年寄りも、日本人も、外国人も集まる。なぜ、人が集まるのか。その魅力は何か。きらり水源村理事長の岩崎さんときらりびとの茂藤さん、石山さんにその魅力を聞いた。



当時の教室や机が、そのまま再利用された研修室

「ここはふれあいの場だからね」

「何かやらなければという中で、グリーンツーリズムが出た」
ストープの熱で暖かい事務所の中、ソファに座り岩崎さんが口を開く。きらり水源村が交流館事業を始めて6年、「まだこれから」と話す。

交流館では1年を通じていろんなイベントを行っているが、それを企画・運営するのがNPO法人きらり水源村だ。職員は全部で5人。地域住民の協力を得て、子ども村やおいしい村づくりなどの試験的な取り組みを行い、グリーンツーリズムを地域に根付かせていこうとしている。

農業体験や自然の中での遊び、生活を体験することで、地球の環境保全や食物連鎖、地球上の自然や生命のエネルギーやリサイクルについて学ぶおいしい村づくり事業では、子どもと保護者が交流館で合宿をする。田畑に作物を植えて、収穫した野菜で料理をする。自然の材料を使って道具を作り、自然と人のつながりを肌で感じてもらうのだ。

また、住民を巻き込む仕掛けとして「きらりびと」と呼ばれる制度を用いている。自分のできることを登録し、交流館へ来た人たちに教える。野菜作りから山仕事まで、できることはさまざま。できることに制限はない。地域に伝わる技や知恵、文化などをつな

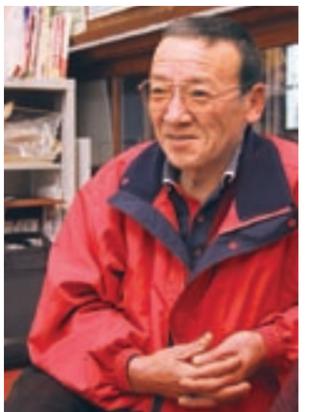
写真右：夏休みに開かれた子ども村では、子どもたちが鞍馬まで遠足に行きました。
写真下：国際ボランティアのジャイカを通じて11カ国から14人が参加した「地域住民主体のコミュニティづくり」で行われた地域資源のマップづくりでは、交流館周辺にある地域資源をたくさん発見しました



いいていく意味もあるこのきらりびと制度には、現在43人が登録している。「きらりびとはNPO法人を立ち上げる前からやっていた。技を持った人が、子どものために始めたのがきっかけ。『きらりと光る技』からきらりびと。持っている技術を伝えるために始めた」と話す岩崎さん。登録してくれる人もっと増やして、いろんなことが交流館でできるようになりたいそうだ。

「ここはふれあいの場でもあるからね。ワークキャンプも受け入れていて、外国から来た人がここで3カ月くらい研修する」と教えてくれた。ワークキャンプとは、世界中の人が日本の農山村で地域住民と共に生活し、ボラ

ンティアを通じて交流するもの。交流館でも平成16年から受け入れを始め、これまでにフランスやドイツなどから400人以上が参加している。「ホームステイも受け入れてるけど、英語は話せなくてね」と苦笑する岩崎さんだが、楽しいと目を細めた。



岩崎 良美さん
NPO法人きらり水源村理事長
水源村とは、昭和の大合併前に地域一帯が水源村という村名であったことに由来してつけられた。